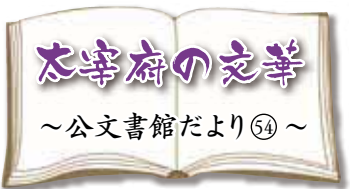


イタツケとダザイフ（飛行場建設と採石問題）

公文書館所蔵「中嶋家資料」の中には、米軍第6160航空基地航空団発行の週刊誌『ブレイン・トーク』1952年10月18日号があります。『ブレイン・トーク』は1948年、団員向けの読み物として創刊され、発刊からちょうど50号目となるこの号には、異動情報やフットボールの基地対抗試合のほか、一面を割いて太宰府天満宮の紹介記事が載せられました。記事では梅と菅原道真にまつわる伝説とともに「東風吹かば……」の歌が英訳され、太宰府天満宮は九州における文化の頂点の一つと評されます。

第6160航空団は当時、板付基地で朝鮮戦争のための武器や食料・資材などの供給に従事した組織で、休戦協定成立の翌年である1954年まで継続します。板付基地とは、進駐軍が接收した席田飛行場(板付飛行場と改称)・小倉陸軍造兵廠(春日製造所・九州飛行機雑餉限工場の総称で、後者2つは附属基地として「ベースワン」「ベースツー」(ベースツーは1949年に返還)と呼ばれました。兵員・軍属やその家族の居住のため基地外にもハウスが設けられ、娯楽施設としてカフェーが置かれるなど(『春日市史』)、基地周辺では彼らのために持ち込まれたアメリカ文化がまちの日常風景となります。

ところで「九州文化の頂点」を有する太宰府町は、この後米軍による砂利採取



問題で悩むこととなります。1954年9月、飛行場建設のための石材採取が町内の採石場(松川・只越など)で盛んになります。発破や砂利運搬車両の疾走により道路・水路や家屋の破壊事故が頻発、また沿道で交通死亡事故が発生するなど、住民への被害が深刻となつていきます。1955年、水城村と合併した太宰府町は5月に新しい議会を作りますが、同時に「駐留軍関係被害対策特別委員会」を設置して対策を講じます。しかし、駐留軍被害に関する事項は調達庁の受け持ちで、被害の申請から補償の決定までかなりの時間を要しました。また当時、実際の採石作業は米軍第802工作航空大隊が行っていたのですが、契約は採石許可を請け負った福岡市の会社と町との間で結ばれており、被害の補償は会社が負担することとなつていました。このことが米軍との

交渉を難しくさせましたが、町は同年7月に米軍・会社・福岡県調達局・那珂土木事務所と協議を持ち、即時3日間の採石停止と道路の補修、採石時間の限定などを決めました。補償問題の解決にはもう少し時間がかかることとなりますが、つかの間、まちから轟音や振動が消えます。同年9月には採石打ち切りとなり、ようやく太宰府に元の静けさが戻りました(『太宰府市史 通史編Ⅲ』)。

太宰府市公文書館 藤田 理子